

光の子



No.192 2019.9.20

●年間聖句 人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。
(マタイによる福音書7章12節より)



「落ち葉拾い」

表紙絵・中島由起子

「ばったんこ」

月出たと大きな声の拳がりたる

有明の月を梢に秋立てり

空檻の月に臭うてをりにけり

けものらの息ひそめたる月下かな

昼月をぼつんとおせて秋の山

ばったんこばたと月を上げにけり

月に鳴く鳥あり渡りゆきにけり

黛 執

「悩ましいいよなあ……」

理事 (ミステリー評論家

ドキュメンタリー映像制作)

稲塚 由美子

「悩ましいいよなあ……」それが菅原さんの口ぐせでした。

子どもとの暮らしの中で、「これがよかつた」と結論づけられるやり方などありはしないと言われているかのよくな厳しい現実がある。それでも、日々起こる簡単ではないことたちへの対処への失敗、何より、その際の子どものたちの言葉・表情から学ぶのだ、というその心根を原点とし、永遠とも思えるほどに、いつも悩み続けていました。だから独断専行せずに、相談し合うことができた。まるで柔らかな風が吹いているようでしたね。

「責任担当制による家庭的処遇」で子どもたちを育てていこうとして設立された、この『光の子どもの家』ができてから34年が経ちます。相変わらず世の中の眼差し

は、いまだ血縁でつながる両親がいて子どもがいる家庭をモデルとし、それが「普通で幸せなのだ」という幻想に満ちています。現実には、形としての家庭も、ひとり親家庭もあり得るし、家庭の中身も様変わりしているのに。

少子高齢化、格差社会などの社会構造の変化、たとえば「経済的な効率主義」に心身ともに追い立てられ、それが人々の心に内面化され、早く結果を出せ、うろろうろする時間などあるものか、早く早く、と人々を追い立てる。効率率がすべての価値観に知らず毒されると、失敗を許さず、人を管理する。「これが一番いい方法に決まっているでしょ」「バカじゃないの」……こうして家庭という閉鎖空間の中、特に大人と子どもの関係ではすぐ起こってしまう上

から目線の支配が始まる。これは、その子が「いる」ことから始まる子育てとは真逆です。密室の中で起こるDVや虐待は、「普通」といわれる家庭の中で多く起こっているのが現実です。

押しつける、決めつける、正義を振りかざす……大人と子どもの関係では上から目線の支配・管理は容易に起こり得る。「光の子どもの家」だって普通と言われる家庭で起こることと同じことが起こり得るのです。その時にこそ、「悩ましい」と口に出して相談し合ってほしいです。

ただ居続けるだけでいい。ぐちゃぐちゃした暮らしを共にして、泣いて笑って怒って喜ぶ。その繰り返しこそが人を生かす。人を育む。人は誰か一人でも心を寄せる、心配する、ただ周りをうろろうろする、そんな「隣の人」がいるだけで、生きていける。もしかしたらヒトが人になる現場とはそんなところなのかもしれない。それは血縁のあるなしにかかわらず、誰であってもいいのかもしれない。それ

が「光の子どもの家」だったし、これからもそうあり続けます。「悩ましいいよなあ……」の言葉と共に。

ベトナムのダナンにある児童養護施設「希望の村—Village Of Hope」で育ったホーティランさんは、「希望の村入所中は、こんな所来たくなかった、こんなところすぐ出たってやる！」と、ずっと思っていたそうです。

それが、日本に留学して、社会に出て働くようになってから希望の村の暮らしがどれほどあたたかいものだったかに気がついたというのです。希望の村を出てちょうど十年の時でした。ランさんは、「あんなに嫌だと思っていた希望の村だったのに、誰かがいつもそばにいてくれたことで、自分は世界中どこにいても生きられる」と思ったと教えてくれました。

「光の子どもの家」の多くの卒園生も、ランさんと同じようなことを告白しています。「光の子どもの家」には、卒園生が実家のように帰ってきます。今では、職員の六人に一人が卒園生です。社会に

出て、また戻ってきて正規職員として働いています。

今や「光の子どもの家」は、懐かしいおうちです。

死にゆく道の途中で

老健施設みゆきの丘 施設長 仙道 富士郎

井上荒野著「あちらにいる鬼」を読んだ。妻が読んでいたので、内容を聞いたら、著者は、若いころよく読んでいた井上光晴の娘で、井上光晴と瀬戸内晴美（現寂聴）との恋愛沙汰が題材であるという。覗き見心半分で読み始めた。

井上の妻と瀬戸内が、井上とつきあつていく様をそれぞれの立場から交互に語る章立てであり、親譲りか、さすがに読ませる。ただ、そんなことよりも、なぜかその理由はさだかでないのだが、読むにつれて、自分の若いころの事が想いだされて、辛いことになつていった。

私が世の中の事に興味を寄せるようになったのは、小学校4年生の時である。担任の先生は、共産党員でなかった

かと思つているのだが、世の中の事を小学生の私たちに熱く語つた。彼から受けた影響は長く続き、大学1年の時には、私はいつぱしの左翼青年になつていた。1960年、まさに安保闘争の年で、東大生の樺美智子さんは、デモの混乱の中、国会内で死んだ。そのとき私は、北大教養部自治会の委員長をしていた。当時の左翼運動は、（今でもそうかもしれないが）権力と戦うだけではなく、左翼内で激しく戦つていた。お互いの人間性を否定する言葉を叩きつけ合い、それだけでなく、実際に暴力をふるい合った。殺人にも繋がつていった。

そんな激烈な事には耐えられなかつたと言えは聞こえはいいが、私の学生運動は、3年足らずで終わつてしまつ

た。80歳を超えた今なお、一人で権力と対峙している当時の同輩の生き方などを目にするとき、自分が当時、しっかりと運動の原理を否定してそこから離れたのではなく、いわば fade out する形でそこから逃れたという事実が、今頃になつてズシリと重くのしかかつてきている。

例えるのもおこがましい話ではあるが、当時左翼の前衛として崇拜されていた井上光晴が、「あちらにいる鬼」の中では、なんともおぞましい一人の男として娘に書かれていたことを読んで、当時の自分のだらしない姿が、脳裏に引き寄せられたのかもしれない。

医学部専門学科に1年遅れて進学したときは、講義にはほとんど出席せずに、麻雀にうつつを抜かしていた。すでに結婚していて、六畳一間のアパートで、麻雀をやられると、妻は、寝る場所がなくなり、押し入れの中で寝ていた。徹夜の麻雀が続くと、妻は居場所を失い、街に彷徨い出ていかざるを得なかつた。

1965年、第一子の男の

子が生まれ、2年おきに男子だけが5人生まれた。その間、私は何をしていたのでろうか。少なくとも、子育ての手伝いは全くしていない。大学院に入学して、実験医学の面白さに迷い込み、来る日も来る日も遅くまで大学で実験を行い、実験がうまくいったと言つては酒を飲み、うまくいかなかったと言つてはまた酒を飲んだ。大学に入学したころの、あの初々しい思索はどこへ行つたのか。

いま50年も前の自分の精神状況を正確になぞることは難しいのだが、当時、買った本を見てみると、学生運動をしていたころの思索を少し引きずつた形の方向性も求めていたのかもしれない。「もの食う人びと」の辺見庸、「分け入つても分け入つても青い山」と歌う種田山頭火など、一人で歩いていく人間の跡を追つていたように思う。

ただ、そうした頭脳の活動を動員する作業が、何らかの形で、日々の行動と関連性を持つていたのかというと、それらは全く分離されており、いくばくか残つていた思索は

思案内で完結しており、世事はそれとは別のところで回っていたように思う。個人の尊厳を損なうので、ここには書けないような経験もあり、唯々、流されて、生きてきたということになる。

悶々と悩んだあの頃からもう40年も経ったが、私を取り巻く世事は目まぐるしく変わっていったものの、そのこと

を介して、自分が少しなりとも精神的に進化してきたかというところ、誠に心もとないのがある。言ってみれば、人にやさしくすること、相手の立場に立ってものを考える事などは続いてきたかなと思う程度である。

いつ来るか分からない死の前に立って、いまうつむき加減に佇んでいる。

共育ちカンガルー日記 (53)

キャッチボール

近藤 みちる

2年ほど前のカンガルー日記に「親の宿題」というタイトルで、優希への「障がい告知」について書いたことがあった。その頃、優希はいわゆる「10歳の壁」に突き当たり、自分と周りのお友達との「違い」を意識し始めていた。

10歳は思春期の入口とも言われ、優希に限らずどの子どもも、自分と他者との違いを強く意識し、劣等感や疎外感を抱えるようになるという。それは思春期の前兆でもあ

り、本格的な思春期が訪れると、子ども達の抱える葛藤は「嵐」と称されるほど混沌さを増していく。親子の関係がぎくしゃくしはじめられるのもこの時期で、「嵐」を乗り越えた後の子ども達は、やがておのおの自立へと向かっていくのである。

障がいを抱える優希にも、年相応に「10歳の壁」は立ち上がり、年相応の葛藤を抱えるようになっていた。それは成長の証でもあり、親とし

て喜ばしさを覚えた一方で、それはまた優希が自分の「障がい」と対峙すべき時期を迎えたことを意味していた。「障がい告知」という重い課題も含めて、親として自分達に新たな役割と責任が課せられたことを私達は悟ったのだ。

実はこれより1年ほど前、優希が2歳の頃からお世話になっっている個別療育の先生が、私にこんな話をしたことがあった。

「優希ちゃんには『自閉症って何?』って自分から聞ける子に育って欲しいと思う。その時には、優希ちゃんが未来に夢や希望が持てるように話してあげればいいのよ」。

だが思っていたよりもずっと早くにその時期がやって来たと気づいたとき、肝心の私はすっかり怖気づいてしまったのである。下手なことを言っただけで優希を傷つけてしまうのではないかと。優希の混乱や葛藤を、果たしてこの私が受け止め切れるのだろうか。自信のかけらもなかった。

このとき先生から一つの案が出された。療育の中で計画

的に「障がい告知」を進めていくというもので、私にとつては願ってもない提案だった。プロに失敗はないはずである。だがその夜、パパにこの話を持ち出した際、パパから意外な答えが返ってきた。「先生のことには信頼しているし、療育の中でやってもらっても構わないよ。でもそれとは別に、俺は俺の言葉で優希と話をしていくつもりだよ。だって俺の娘なんだから」。

そこには静かな力強さと深い優しさに満ちた、父親の眼差しがあった。私はふと気づかされたのである。正解も模範解答も、そんなものはきつとどこにもないのだと。これまでだってそうだった。答えはいつも優希の中であって、優希が必要としていることは、いつだって優希が私達に教えてくれたのだ。果のないキャッチボールを交わすように、これから先も優希と向き合い続ける他はないのだから。優希は紛れもなく私達の娘なのだから。

後日、私は先生にその思いを伝えた。

「あれからパパと話し合ってみました。パパは『自分の言葉で、優希と話をしたい』と言って。私もパパと一緒に頑張ってみようと思います。危なっかしく見えるでしょうし、失敗もするかも知れない。でも優希を育てるって、そういうことなんだと気づいてください」。その言葉に、先生はしみじみと言った。

「パパもママも本当にたくましくなったね。きつと大丈夫。優希ちゃんも幸せだね」。

その後私達は、優希の障がい「敏感」という言葉に置き換えて、慎重に優希との対話を重ねてきた。だが優希も6年生になり、今ではそんなオブラートに包まれた曖昧な説明では納得せず、もつと核心について知れたがらうようになってきている。優希が本来の意味で自己理解を果たすためには、避けては通れない道なのだろう。

「優希は障害者なの？」

優希からの問いは、大抵はこんな具合に直球ど真ん中だ。そう、優希にはまだ先入

観というフィルターがない。だからこそ、私達も余計な先入観を取り払って、優希のこの無防備なまでに真っ直ぐな直球を、真正面で受け取ってやらねばと切に思うのである。もちろん受け損なうことだってしばしば。だが次には優希も変化球を投げてきたりして、こんなふうにはキヤッチボールは続いていくのだから

古本

大分以前の事になるが、私は「浮野」という俳句誌に、美術関係の裏話とでもいうようなものを書かせていただいた。

この俳句誌は創刊以来40年を超えている。

月刊で出されているから、もう500号を超えた俳句誌である。

実は、この俳句誌の創刊号から、表紙絵を描かせて頂いているのだが、その俳句誌に角田紫陽という俳人で、元高

う。

今ではこんな毎日がたまたまなく愛おしく、言い換えれば、これが優希と共に生きていく私達の人生そのものなのである。

鉄棒の夏空

蹴つて蹴つてかな

みちる

彫刻家 中島 睦雄

校教師の方が「話の屑籠」というタイトルで、俳句を中心とした素晴らしい文をお書きになっていた。博学多識で知られた先生だったので、いつも楽しみに読ませていただいたものであった。

ところが、この角田紫陽先生が亡くなられてしまった。しばらくすると、浮野の主宰の落合水尾先生から声がかかった。

「何か書いてみませんか。角田先生の後に」ということ

であった。

私は即座にOKとお答えする訳にはいかなかった。何しろ、名文の角田紫陽先生の後だから、これは大変である。

ホームランバッターの後に、三振バッターが出てくるようなものだからである。

しかし、落合水尾主宰から「何とか書いてみませんか」と言われ、私は決心をした。

「じゃあ、やってみようかな」と。そして始まったのが、角田先生の「話の屑籠」に習って「展覧会の周辺」というタイトルで、小さいいろいろな裏話を書き始めた訳であった。

以前から、絵画や彫刻の展覧会には出品し続けていたもので、いろいろな話が、探せばあるのであった。

そこで、作品を作り出す苦労や、仲間との交流による刺激、その他いろいろの事を書き続けた。

しかし、展覧会の周辺とは、全く関係のない話なども、たくさん入れざるを得なかった。

そんなことをしているうちに「浮野」の創立15周年の記

念事業の一つとして、私の拙い文章を、1冊の本にまとめ出版してくださることになった。

タイトルは「夜明けのプロムナード」とした。美術とは全く関係のない、私の身の回りのことや心の内なども入れざるを得なかった。それが40ページ余りの本になって出版されたのである。

平成4年の11月だった。あれから、ずいぶん長い時間が過ぎた。「夜明けの……」も、いつの間にか私の持ち分が殆どなくなってしまった。あと何冊かは自分で持って

いたい。若しかしたら、古本屋にあるのかもしれないな、と思った。そこで、息子に「古本屋に行つて探してみろ」と話しておいた。

なかなか返答がなかったが、或る時、古本屋で買ったからと、持って来てくれた。最初の出版から長い月日が経っているのに、あまり汚れてはいなかった。

早速、表紙をめくつてみると、驚いた。出版の直後に、彫刻の仲間のF氏にプレゼントしたものであったのである。

謹呈
平成五年二月 中島睦雄

F様

このようになっていた。なあんだ、Fさん、古本屋へ売ってしまったんだ。今度会つたら言つてみようと思つた。

その後、Fさんは仲間の美術団体展に出品しなくなり、いろいろな会合にも姿を見せなかった。

そんなわけで「Fさん古本屋へ売っちゃったんべ!!」と言う機会がなかった。その後、3年くらい経つた

時、Fさんは病気で亡くなつたと聞いた。

そうであれば、Fさんは、決して「こんな本、くだらないうから古本屋へ出しちゃえ」というのでもないと思えた。

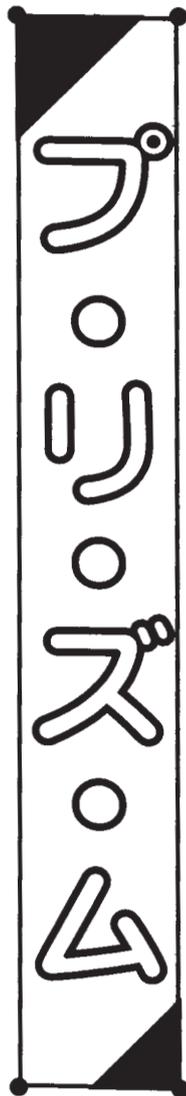
Fさんの死後、奥さんが古雑誌を捨てるとき、この本は捨てずに、古本屋へ出したのかもしれない。そうであれば、有難いことである。

それにしても、執筆した本人に古本屋から戻ってきたということが、とても珍しい事のように思えた。大事にとつておこう。

原田家

遠藤 恵里香

毎年恒例の夏休みの家行事!今年の原田家は赤城バイブルキャンプへ行きました。子どもたちは普段とは違うのびのびとした環境に大はしゃぎ。到着するやいなや居室の2段ベッドを見て、一目散に



気に入ったベッドに駆け込んでいました。今回家行事初参加の菜々は2段ベッドを見ると、上段をしっかりと確保。満面の笑みでベッドから顔を出し、私を見下ろしていました。寝床の確保を終えると、今度は卓球台のある礼拝堂に行き、夕食時間ギリギリまで

卓球トーナメントをして遊んでいました。夕食では、いつも野菜を食べない子どもたちが「美味しい!」と言つてもりもり野菜を食べる姿を見ることができ嬉しい気持ちになりました。デザートでは、家でやると言つたら私が絶対に「ダメ!」というであろうメ

ントスソーダフルーツポンチが出てきて、みんなメントスを入れ、泡が吹き出す様子をワクワクした顔で見つめていました。

2日目は竹の棒にパン生地をつけ、焼き火で焼く、棒パン作りもさせてもらいました。地道に竹の棒を回し続け、出来上がったら、焼きたてのパンをお好みの味付けでいただきます。焼きたてなので皆熱そうにしていました

が、幸せそうな顔でパンを頬張っていました。

最終日はギリギリまで赤城バイブルキャンプの子どもたちとトランプをして、別れを惜しんでいました。3日間すべて子どもたちの思い出に残る貴重な体験になったと思います。

赤城バイブルキャンプの皆さん、ありがとうございました。



竹にパン種をまいて焼く棒パン

佐藤家

新吉屋 健太

梅雨は雨が少なく夏場の水不足が気がかりでした。とい

うのも光の子どもの家では例年、組み立て式簡易プール（黄色プール）で夏休みの日中を過ごすことが伝統となつていきます。その黄色プールは設立当初から現在に至るまで活躍しているプールであり、35年もの間、子ども達を見守つてきてくれました。

今年もなんとか水不足の心配も解消され、子どもたちも待ちに待ったプールを設置しました。しかし、佐藤家でののは、小学4年生の富士雄と、小学2年生の達也と幼稚園年中の吉尚の3人です。

昨年の吉尚は、トイレで用をたすことができない時もありました。そういう子（まだおむつをしている子）には、ビニールプールを用意しています。ビニールプールは小さいので泳ぐことはできず、浸かったり、宝探しゲーム・水かけっことなどくらいが楽しめる程度のものです。

皆と同じ事がしたい思いが人一倍強い吉尚にとって、トイレトレーニングの良いモチベーションになったのでしようか。今年は吉尚も成長し



伝統の黄色プール

て、ちゃんとトイレに行くことができるようになり、晴れて伝統の黄色プール組の仲間入りです。

黄色プールは吉尚にとって大きいプールなので、体を動かすことが上手な吉尚は泳ぎも誰に教わったわけでもなく、ゴーグルもせずに潜って目を開けスイスイ泳いでいました。東京オリンピックにはぜひ間に合いませんが、もしかしたら、将来はスポーツ選手としての活躍も、と今後ちよつと期待です。

仙道家

小西 剛史

毎年恒例の秋田旅行へ今年も行ってまいりました。今年初めての参加になる小4の礼、今年最後の参加になる高3の鮎子を加えた総勢8名での4泊5日です。来年度の就職を控えた鮎子は、就職説明会のため1日遅れて新幹線での途中参加となりました。

思えば鮎子は、今年初参加の礼とちよつと同じ小4の時、初めて秋田旅行に参加しハイテンションなまま回転寿司屋で20皿以上食べて直後に全て吐く……という衝撃的なデビューを経たのち、何だかんだでほぼ毎年「秋田に行きたい！」と言って参加し続けてきた子です。早いもので光の子どもの家に来てから9年が経ち、来年には高校卒業、就職ということでここを自立していくこととなります。

「今年は『最後』だから絶対秋田に行つて海で泳ぎたい！」と言っていた鮎子ですが、天候の都合で鮎子が来る前に海水浴へ行ってしまったため、その願いは叶いませんでした。



仙道家、秋田の海へ

残念がる鮎子に「就職しても夏休みを利用してまた来年参加すればいいじゃん」と伝えると「いや、ここを出たら参加しないから」と頑なに拒んでいました。何かのプライドがあるのでしょうか。

でもそんなプライドも消えて、いつかまた必ず秋田旅行に飛び入り参加でやってくる……そんなことを予想しながら、居ることが当たり前だった鮎子からの『最後』という言葉の寂しさを自分自身が打ち消しているような気がしました。

倉澤家

倉澤 智子

先日、卒園生の寛子が生後5ヶ月の息子を連れてやって来た。どうやら、同居している義母との関係が最悪な状況になり家出同然の形で出て来てしまったようである。一週間ほど置いてほしいということとで、本園に比べて静かで、空き部屋がある倉澤家に来ることになった。

義母との関係については、以前から話を聞いていたが、どこの家庭でも多少の嫁姑問題はあるものだから……と軽く考えていた。しかし家出を考えるほど深刻な状況になっていたようである。

そんな中、寛子が言っていたのは「自分一人なら我慢するが息子のために今の状況をなんとかしなければ」ということだった。大人同士の関係がぎくしゃくしている中で子どもが安心して暮らし、成長できるわけがない……ということなのである。

私が彼女を担当したのは高校2、3年の2年間であったが、その頃の彼女からは想像できないほど母として強く、

たくましく成長していた。

倉澤家に乳児がやって来て、数日間もの間一緒に過ごしたのは初めてのことであった。人の表情を柔らかくし、優しい気持ちにさせてくれる乳児と共に過ごすということは子どもたちにとっても貴重な体験だったと思うが、子どもたちへの乳児の対応は様々だった。「寛子ちゃんたちいつまでいるの？」と聞いて来る者、抱っこさせてもらい笑顔であやしている者、「ちょっと見て」と頼まれ、どうしていいかわからず困惑する者。子どもたちの生育歴や現在の親との関係などが大きく影響していたように思う。

中高生女子ばかりの倉澤家、もしかしたら数年後に母になっっている子どもがいるかもしれない。その時に、寛子のように子どもを自分より大切な存在として守れる母であってほしいと願っている。

牧野家

牧野 由紀子

夏休みといえど海、プール、映画、お祭りなどなど予定がたくさん、しかし、宿題



佐野を歩く

もたくさん。夏休み序盤は「ほら、海に行く前に宿題終わらせるんだよ」「うん!!大丈夫!!」と楽しみな行事を目標に宿題へのモチベーションも比較的高めで、イヤイヤ、ぐずぐずしつつも、なんとか夏ドリルを進めていく。しかし、一つ一つ楽しい行事が終わっていくと、残された宿題に取り組むペースは一気に下降していく。そして、大人の方も少しずつ夏の疲れが出てきてペースダウン……。今年も、後回しにしてきた読書感想文に悪戦苦闘する日向。下書きのさらに下書きから始め



るが、原稿用紙を前に書いては消し、「もく分かんないよ」と声を上げイライラし、原稿用紙を放り投げるのは毎年恒例になっている。数日かけ、佐藤指導員に助けてもらいながらやつと書き上げていた。

夏休みもあと1週間となり、読書感想文も終わり、今年も夏ならではの経験をめいっばい楽しむことができた。どの子も夏休み前に比べるとまた一回り成長したのではないかと思う。

心理室から 積 みどり

夏休みに入った途端、酷暑が始まりましたが、みなさま体調など崩されておりませんか？

この夏、事務所脇の植木の

影で野良猫が4匹の仔猫を産んでいるのを発見しました。何人かの職員で、お引越ができるようになるまでという気持ちでダンボールを置いたり、傘を差しかけておいたりしながら見守っていました。親猫は日に日に痩せ細り、仔猫も死んでしまったり、いなくなってしまうたり（カラスに連れて行かれたのかな……涙）。でもこの親猫、捨て猫だったのか、仔猫たちがいなくなった途端に人に寄ってくるようになりました。夏休みオープニングパーティの中にもチョロチョロと現れて、動物好きの子どもたちは触りたくてウズウズしています。中には猫嫌いな人やアレルギー持ちの人もいるので、光の子どもの家での完全

なる飼い猫とすることはできませんが、猫に癒される子どももいるだろうということ。で、なんとなく共生できる道を探りながら、猫の虫駆除と避妊手術を動物病院にお願いしました。そして某職員のお宅でお世話になりながら、ゴミを漁ったり砂場をトイレとすることがないように躡けられたら、うまく折り合いながら生きていけるかもしれないとひそかに思っているところです。

お友達とうまくいかない時や大人に叱られてしまったり心が折れてしまった時なんか、そつと慰めてくれるようなそんな動物がいるのも悪くないのではないのでしょうか。

反射光

「光の子」の宛名シールを貼ったり、袋詰めを手伝ってくれた美樹が、「プリズム」を読んで「おもしろかった。あの置き傘のやつ」と言ってくれました。「でもなんで名前が違うの？」▼「みんな、それぞれに事情があつてここに来ているよね。中にはどこにいないか秘密にしなければならぬ子もいるんだ。もしその子の名前だけ変えて、他の子は名前を変えないと、『ああこの子は』つてなってしまうでしょ。だからみんな名前を変えてあるんだよ」▼バックナンバーを見ると「楓」という仮名が2、3人の子どもに使われていますが、最近はいちど決めた名前は通して使い続けています。「光の子」をお読みいただく皆様にも、暮らしの積み重ねや、子どもたちの成長、我々職員のはたらきを、追いかけてながら見守っていただければ幸いです（義）

訃報

2006年より12年間子どもたちと職員のポートレイトを撮影していただいた写真家の福島力さんが昇天されました。御国において主と共にあることをお祈りいたします。

現場から…アフターケア④

4人について

池田 祐子

☆豪規について☆

アフターケア、といえば、今年5月発行の光の子「プリズム」に書いた豪規のことを思い出します。

昨年10月、光の子どもの家へやってきましたが、半年後には家族の出身国へ帰りました。どんな町なのか、家なのか、元気で暮らしているのか、など帰国後の様子について知ることができず、心配は尽きません。

豪規のアフターケアで、できることは祈ることだけです。

☆香織について☆

香織は、高校卒業と同時に光の子どもの家を退所し、今は学生です。

充実した学生生活を送り、光の子どもの家にも年に何度か「里帰り」してくれそうです。そのたび、香織を慕っている子と一緒にすごしてくれたりもします。

先日、香織と話す機会があり、親について聞いてみました。

親は香織とずっとかかわり続けてくださり、学生生活も経済的に支えています。

でも、香織は親に対し、拒否的で最低限のやりとりしかしていません。

「親には、あまり会いたくないの？」

と、きくと「もう、そういうのはないよ」

と、香織。だからといって積極的にやりとりするわけではないようですが、これまでとは少し変わってきたようです。

☆隆司について☆

隆司は、特別支援高校卒業後、退所。グループホームへ入所し、新たな生活を始めますがうまくいかず、施設へ移りました。今もそこで生活しています。

隆司は、長期間不安定な状態が続き、光の子どもの家の職員が訪ねていっても会うことができなかったり、自分の家族の葬儀に参列できないほどでした。

そんな隆司が数年前、ひよっこり光の子どもの家にやってきました。どうやらトラブルがあり、とび出してきたくうでした。

翌日、先方の施設長が迎えにきてくれました。

施設長によると、隆司は少しづつ落ち着いて生活をしているとのことでした。

当時理事長だった菅原が「お正月、こちらに一泊でもできれば……」と話しましたが、これまで実現していません。

光の子どもの家で今、生活している子どもたちがいます。その上で隆司のことを受け入れる余裕が私になかったからです。

ただ、今後「泊まりにおいでよ」と言える日が来るのかわからないのが隆司に対して申し訳なく思います。

☆有里について☆

有里は、幼稚園の年中で光

の子どもの家にやってきましたが、数ヶ月で退所、家に帰りました。

やってきてまもなくは、皆のいるリビングに入ることができず寝る前も泣くことが続き、なじむことにとっても時間がかかりました。

なれてきてから幼稚園年中組に通い始めました。幼稚園のおゆうぎ会の練習ではほかの園児の振りまで覚えてしまい、本番のおゆうぎ会では、欠席した園児の代役として踊りました。

とてもはずかしがり屋で決しておしゃべりではないですが笑顔が増えていきました。

やがて、退所し家に帰りましたが、クリスマスや有里の誕生日にカードやプレゼントを贈ることは続けてきました。その度にご家族から有里が元気に生活している様子を知らせてもらい、成長を感じました。

有里の高校卒業を区切りにかかわりをやめてしまいました。それでよかつたのか、また、それまでかかわりを続けてきてよかつたのか、何年経つてもわかりません。

自立進学基金への寄付金感謝報告

2018年4月1日から2019年3月31日までに受領いたしました「光の子どもの家自立進学基金」への寄付金について、感謝してご報告申し上げます。

皆さまからの篤いご支援と励まし、そしてお祈りによって光の子どもの家の子どもの自立と進学が支えられております。ご協力に心より感謝申し上げます。

尚、ご寄付をいただいたにもかかわらず、本欄にお名前がない方がいらっしゃいましたら、お手数ですがご連絡下さい。次号（「光の子193号」）にて訂正致します。

2018年度募金総額 1,528,089円

松堀ホ古船平東野名長常竹高高杉須神清シし佐近小工川神金岡石
 岡江 | 谷橋林 中 口屋 本 松内橋橋原賀保水ギ ず 伯藤林藤島山田崎川
 啓悠 イ 清邦恵 野 新郷 洋み蘭典勝庸 亨ト の 雅一幸睦泉卓留
 貴子ン二子子子会み会会介り子代利子幸桐エ会勇夫葉子子心也子浩

横(株)山山矢八明森
 ユニ田田澤木治学院山
 尾ニオ 友ン義 澄祥 P T A
 子画人智香子ひろみ
 (五十音順敬称略)

☆光の子どもの家の子どもの自立と進学をお支えいただき、心より感謝申し上げます。

今年度は、大学に在学中の卒園生の学費と生活費補助に使わせていただきました。

自立進学基金 代表 藤岡孝志
 社会福祉法人 光の子どもの家 理事長 大高晋一郎

樽見幸江
 東洋英和女学院小学部
 東洋英和女学院
 東洋英和女学院 小学部母の会
 東洋英和女学院
 中学部高等部母の会
 東洋英和女学院
 中高部宗教委員会
 東洋英和女学院
 中高部図書活動委員会
 東洋英和女学院同窓会
 戸巻芙美夫
 豊国道江
 中島ひろたか
 中澤雅宏
 長沼修
 永野三恵
 中村佐智代
 西新井教会保育園
 西山守
 日本キリスト教団
 青戸教会子ども礼拝
 日本キリスト教団
 安行教会
 日本基督教団岩槻教会
 日本基督教団荻窪教会
 日本基督教団
 金沢元町教会CS
 日本キリスト教団
 鎌ヶ谷教会CS

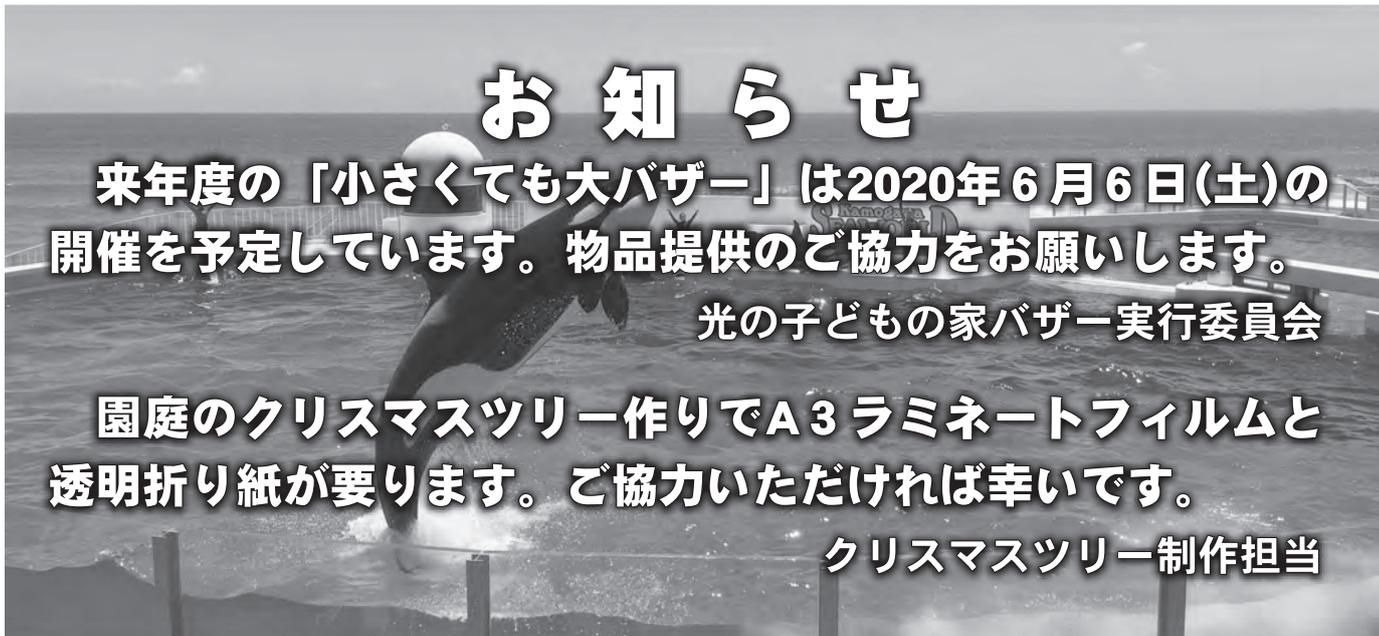
日本基督教団
 鎌倉恩寵教会
 日本キリスト教団
 北本教会
 日本基督教団
 京葉中部教会
 日本基督教団越谷教会
 日本キリスト教団
 埼玉和光教会
 日本キリスト教団
 佐渡教会
 日本キリスト教団
 狭山教会
 日本キリスト教団
 渋谷教会
 日本基督教団白岡伝道所
 日本キリスト教団
 巣鴨ときわ教会
 日本基督教団
 世田谷中央教会
 日本キリスト教団
 仙台川平教会
 日本基督教団
 田園調布教会
 日本基督教団
 等々力教会
 日本基督教団
 名古屋中央教会
 日本基督教団曳舟教会
 日本基督教団
 ひばりが丘教会

日本キリスト教団
 西川口教会
 日本キリスト教団
 西千葉教会
 日本基督教団東村山教会
 日本キリスト教団
 三島教会
 日本基督教団水元教会
 日本キリスト教団
 元住吉教会CS
 日本キリスト教団
 守谷教会
 日本キリスト教団
 薬田台教会
 日本キリスト教団
 横須賀教会
 日本キリスト教団
 横浜海岸教会
 日本基督教団
 四街道教会CS
 日本キリスト教団
 和戸教会
 日本聖書神学校
 学生自治会
 西野友英
 西野三緒子
 認定こども園
 桜の聖母幼稚園
 根岸亜麗朱
 野田教会CS
 野田拓文
 野村勲

はむこ会
 原田町子
 檜山幸子
 弘前学院聖愛
 中学高等学校宗教部
 広島女学院
 メサイア委員会
 フェリス女学院大学
 フェリス女学院大学
 フェリス女学院大学
 宗教センター
 奨学会
 藤岡堯
 藤岡孝志
 藤原礼子
 普連土学園
 北陸学院中学校高等学校
 細川敦子
 堀田哲一郎
 本田徹
 松永睦美
 松野敦子
 丸亀聖書教会
 三木双葉
 溝呂木武幸
 光田邦二
 宮崎小百合
 宮野恵子
 宮本眼科 宮本正
 明治学院高等学校
 目黒星学園小学校
 森節敦
 八木橋子

☆光の子どもの家をお支えいただき、心より感謝申し上げます。
 光の子どもの家を支える会
 代表 永野三恵
 社会福祉法人 光の子どもの家
 理事長 大高晋一郎

矢崎正一郎
 谷沢紀美子
 山北直美
 山崎龍一
 山田智
 大和田友子
 湯澤真彦
 横倉順治
 芳賀慶治
 吉野久美子
 立教女学院中学校
 鷲尾昭
 渡辺和泉
 渡辺貴子
 (五十音順敬称略)



お知らせ

来年度の「小さくても大バザー」は2020年6月6日(土)の開催を予定しています。物品提供のご協力をお願いします。

光の子どもの家バザー実行委員会

園庭のクリスマスツリー作りでA3ラミネートフィルムと透明折り紙が要ります。ご協力いただければ幸いです。

クリスマスツリー制作担当

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2019年7月～8月

【2019年8月末現在】

幼児6名 小学生12名 中学生6名 高校生7名
他1名 計32名

【7月】

- ☆ 2日 光の子どもの家後援会、しずくの会とのバザー反省会 感謝
光の子どもの家後援会によるうどん玉作り 感謝
- ☆ 3日 光の子どもの家後援会によるうどん会 感謝
- ☆ 5日 若月健悟牧師(守谷教会)による職員礼拝 感謝
- ☆ 8日 7月生まれの誕生会
- ☆ 12日 木田浩靖牧師(東埼玉バプテスト教会)による夕礼拝
- ☆ 19日 夏休みオープニングパーティー
- ☆ 21日 園庭にプール設置
- ☆ 23日 原田家が赤城バイブルキャンプへ(2泊3日)
- ☆ 25日 健康診断
- ☆ 30日 通報避難訓練
- ☆ 30日 小学高学年中心で栃木県佐野市へ(2泊3日)

【8月】

- ☆ 2日 イートアンド様による食育講習と餃子作り体験 感謝
- ☆ 3日 幼児1名、小学生3名が富士見乳児院の夕涼み会へ
- ☆ 4日 幼児1名体操クラブサマーキャンプ(2泊3日)
- ☆ 4日 牧野家が安房勝山へ(2泊3日)
- ☆ 7日 小学生3名、早稲田大学理工学部の化学体験イベント「ユニラブ」へ

- ☆ 7日 仙道家が秋田へ(4泊5日)
- ☆ 11日 高校生1名が北海道へ(3泊4日)
- ☆ 13日 幼児グループがむさしの村へ
- ☆ 16日 小学生1名さいたま水族館へ
- ☆ 17日 幼児1名「おかあさんといっしょ」のファミリーコンサートへ
- ☆ 18日 中学生1名、乳児院の先生と外出 感謝
- ☆ 21日 小学生7名、グリコピアCHIBA見学とプログラミング体験
- ☆ 22日 開成学園の齋藤氏、宮本氏による化学実験教室 感謝
- ☆ 23日 足立泰代(性教育ファシリテーター)氏による中高生男子に対する性教育プログラム実施
- ☆ 26日 夏休みさよならパーティー

〈寄贈者各位(敬称略)〉

木暮伸二 長谷川一男 鴨川会 森島理央
百々幸雄 渡辺敏夫 高橋会計事務所
小池みどり 根岸亜麗朱 伊藤宏 ゴルフ・ドゥ
阿久津貞夫 竹林勝子 マルキチ物産 櫻井秀夫
イートアンド(株) 江崎グリコ株式会社
(株)なとり 稲塚由美子 東埼玉バプテスト教会
他多数の皆様

〈ボランティア各位(敬称略)〉

久保田修 櫻井秀夫 岡本有代 常松洋介
山田義人 関東工業自動車学校 マルハン古河店
山田智 山田裕子 イートアンド(株)

☆残暑も厳しいですがお体崩さぬようお祈り致します。
(黒川)